

翌日。大学の講義を終えたコナンは、すぐさまベーカー街に戻り、階段を駆け上がってリビングに飛び込んだ。

「アーサー、あれから何かーって、ぐわあ！ 眩しい！？ おい、なんだこれっ!？」

「おかえり、コナン！ どうだい？ この前作ったアーク灯に改良を加えてみたんだ。光量は前作比で実に六十パーセントアップ！ 問題は電極の炭素棒が出力に耐えられ……あ、消えた」

「目が眩んで何も見えない！」

「バカだなあ、裸眼で直視したのか？ 直接は見ないか、僕みたいに遮光グラスを付けな」と

「俺は自分の部屋に入っただけだぞ。」

昨日の結果が気になって、取るものも取りあえず帰宅してみればこの様だ。コナンは唸り声を上げながら、何度も目を擦った。

ようやく視界が戻つてくると、アーサーが部屋の隅の作業机で、取り外したアーク灯を弄っているのがわかった。反省した様子は微塵もないーと言うより、反省するという発想がないのだ。コナンは忌々しげに同居人に近付く。

机に片手を突き、ぐっと横から身を乗り出して、

「ぞ。」

「うん。このアーク灯でさっきの耐久度なら、《Eソード》電極は下手に触らない方が良く。やはり予定通り、まずは電源と一体化するだけにしよう」

「俺が聞いているのは、なんとかソードのことじゃなくて、クロエ・ノートンの件だ！ あれから進展はあったのか？ レストレード警部から連絡は？」

「まだ」

「む。そう……」

勢い込んできただけに肩透かしを食らった気分、コナンは机から手をどかした。一方アーサーはアーク灯を片付けて、昨日作っていた例の機械を嬉しそうに取り出した。いい気なものだ。

昨晚。コナンとアーサーは、ウエストミンスター中を駆け回ってクラウスを捜し出し、クロエ・ノートン宅で発見した血痕について報告した。スコットランド・ヤードでも被害者の住まいは調査していたが、あくまで通り魔ー《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行と見ていたため、カーペットの裏までは調べていなかったらしい。

警部が慌ててサー・ペンタイン通りに人をやる傍ら、コナンとアーサーの二人は警部を連れ立

ってスコットランド・ヤードに。安置されていたクロエ・ノートンの遺体を検分し、遺留品を見せてもらいつつ、犯行現場の詳しい情報を担当した巡査から直接聞き取った。

結果わかったことは、犯行現場に血痕はほとんどなかったという事実。遺体が発見されたのが一昨日なので、スコットランド・ヤードでは前夜から朝まで降っていた雨で流されたのだからと考えていたらしい。

また、遺体は装飾品の類は一切付けていなかった。仮に宝石箱の中身が存在したとすれば、その行方も気になるところだ。

「……どう思う？」

「何が？」

「クロエ・ノートンの事件に決まってるだろ。殺害現場が被害者の自宅だとすれば、これまでの《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行とは毛色が違う」

「ふーん」

「ふーん、じゃないっ。あるいは、奴に迫る重要な手掛かりかもしれないぞ？」

「あんな、コナン。僕は別に殺人鬼に迫りたいわけじゃないんだ。それより手紙だよ。警部もさすがに今度は本腰を入れて家宅捜査するはずだ。依頼主は秘密裏に回収したいと仰せなんだぞ？」

「あっ！ 不味いじゃないか。手紙が市警ヤードの手に渡ったら……！」
慌てるコナンに、「落ち着きたまえ」とアーサーは振り向きもしなま言った。

「一応警部には、それとなく事情は話しておいた。あまり大っぴらにしないで欲しいと。まあ、《ジャック・ザ・ナイトメア》に関わる手紙なら、それどころじゃないけどね」

「お、おい？ 《ジャック・ザ・ナイトメア》について……そんな可能性があるのか？ 相談事を書いた手紙だろ？」

「可能性はいつだって無限さ」

発明品を弄りながら、アーサーは、やはり他人事のように言う。コナンは難しい顔で、むう、と腕を組んだ。

そこに、

「よお。邪魔するぜ」

おざなりなノックに続いて、リビングのドアが開いた。顔を出したのは、クラウスだ。

「警部？ どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも、調べが付いたら教えろって言ったのは、そっちだろうが。ああ、寒い寒い。なんかこう、身体が温まる、ご機嫌な物はないか？」

「む。待ちたまえ、警部。いま《電気炉》の出力を上げよう。先日調整したばかりで、新しい

サクラダイトをたっぷりとー」

「お前の変態電気暖炉はいらんっ」

「暖炉ではない！ これだけでベーカー街すべての電力を賄える、ゴージャス且つスペシヤル且つ大層ご機嫌なー！」

「俺が要求したのはウイスキーとかブランデーの方だ！ ああ、もういいや。自前でやるから。つたく……」

「……警部？　なんで普通にスキットル持ち歩いてるんですか？　勤務中ですよね？」

クラウスはコートも脱がずにテーブルに着くと、懐からスキットルを取り出してグビリと呷った。部下の目がないので、本当に遠慮の欠片もない。スキットルの中身を飲んでひと息吐くと、今度は葉巻を取り出し、マッチで火を付けた。

コナンはため息を吐きながら、灰皿を取ってテーブルに。

自らも椅子に座り、クラウスの前に灰皿を差し出した。

「……わざわざお越し頂いたということは、何かわかったんですね？」

「新たな事実がハンメーしたってわけじゃないぞ？　血痕が残ってたアパートも、まだ調査が終わってないしな。報告しに来たのは、クロエ・ノートンの身辺調査の結果だ」

「え、むしろまだ調べてなかったんですか？」

「あのなあ？　遺体が発見されてから、まだ二日だぞ？　誰かさんみたいに、ひと目見て何もかも判明できるか。そもそも、この件は俺の担当じゃないんだからな？　それをこうして寒い中、いちいち足を運んでやってるのに……」

「わかりましたよ。うちのブランデーもお出ししますから、とにかく聞かせて下さい」

コナンになだめすかされて、クラウスはようやく手帳を取り出した。

ゴホン、とわざとらしく空咳を打ち、

「……被害者のクロエ・ノートンだが、歳は二十二。とはいえ、出自は不明だ。どうもイースト・エンドの貧民街の出身らしい。路地裏で花を売っていたときもあつたそうだ。だが、ある時期から突然、人が変わったみたいに、金持ち連中が集まる社交界に顔を出し始めた。そこで何人かのパトロンをつかみ、現在に至っている。最近じゃかなり派手に遊び回ってたみたいだな」

「それはつまり、彼女は、その……」

「いわゆる高級娼婦か」

「ア、アーサーっ。言葉を選べ。共和国化した、いまの世の中でそんな……」

コナンが赤らんで注意したが、アーサーはどこ吹く風だ。

「売春は人類最古の仕事らしいぞ？　しかも、クロエ・ノートンは成功者だ。ともあれ、余計な感傷は要らないよ。必要なのは、率直な事実だ」

作業机に向かったまま、「警部」とアーサーが続きを促す。こちらには背中を向けたままだが、話はちゃんと聞いているらしい。クラウスは「んん」と、もう一度咳払いをした。

「被害者は最近派手に遊んでたと言ったが……一方で、悪い噂もあったようだな？ なんでも、遊び慣れない男を誑かしては、貢ぐだけ貢がせてから、最後は手酷く捨てるって真似を繰り返していたらしい。それも遊び半分。彼女に破滅まで追いやられた男は、そろそろ一ダースに届くって話だ。もつとも、そちらの裏付けまでは、まだ取れていないがな」

「……悪女だったと言うことでしょうか？」

「美女なんてのは大概悪女だぜ、コナン君よ？」

『君』付けは止めて下さい。」

「ま、そんなわけで、クロエ・ノートンに関しては、急遽怨恨の線も浮かび上がってきたんだが……何しろ、現場には野郎の仮面があったからな。スコットランド・ヤードでも、まだ『ジャック・ザ・ナイトメア』の仕業だって考えが主流の——」

「レプリカだよ」

「——ままで……って、な、なに？」

ぼそりと告げたアーサーの言葉に、クラウスが思わず吸っていた葉巻の灰を落とした。アーサーが一度作業の手を止め、背もたれに肘を置いて振り返る。

「マリーの話だと、とある新聞社が写真を載せた結果、街の雑貨屋にはレプリカが並んでるぞうだ」

「はあ？ 殺人鬼の仮面が？」

「ロンドンっ子らしいブラック・ユーモアじゃないか。もちろん、その辺で売ってるようなのは出来も悪いが、中には本物と見間違っう出来映えの物も売っている」

「今回の現場にあった奴がそれだったのか？」

「僕は前に本物も見せてもらったことがあるからね。昨日市警で拝見した遺留品の仮面は、少なくとも本物ではなかった」

「本物なら、俺だってこの目で見てる。だが、違いなんかわからなかったぞ」

「目だ」

「目？」

「そう。警部は、実際にあの仮面を付けたことないだろう？」

「お前が付けたことがあることの方が驚きだ。いつの間に……というより、いまさらだが、どんな神経してるんだ」

クラウスが渋い顔をしたが、もちろんアーサーは気にしない。

「本物の仮面には変わった特徴があつてね。恐ろしく視界が狭いんだ。ニッポンに能という仮

面劇があるが、そこで使用される能面よりも、さらに狭い。余程慣れて——訓練していなければ、目を塞ぐのと変わらないほどだ。ところが、クロエ・ノートンの殺害現場にあった仮面は、視界が十分に良好だった。あれは、『ジャック・ザ・ナイトメア』の仕業ではないよ」

「……そんな重大なことを、こんなところでさらつと言わないでくれないか？」

クラウスは苦々しく言っつて、ヤケクソのようにスキットルを呷る。コナンはただただ、言葉を失っていた。

なんとか頭を振り、

「待ってくれ。今回の件は『ジャック・ザ・ナイトメア』とは無関係ってことは……アイリーンの依頼はどうなるんだ？」

「アイリーン？」

「あ、いえ」

じろつと目を向けるクラウスに、コナンはとっさに言葉を濁す。

そのときだ。

「アーサーさん？ あなたに電報よ？」

ノックが続いて、ドア越しにターナの声が出た。「開いています」とアーサーが応えると、ドアを開けてターナが顔を見せる。

「あら、レストレード警部。いらっしやってたのね。声をかけて下さればよろしかったのに」

「……………」

「警部？」

「…………ご、ご無沙汰しています、ミス・ハドソン」

「まあ。まだそんな。ターナで結構ですよ？」

ターナがクスクスと笑うのに対し、さっきまでだらけ切っていたクラウスはカチンコチンに強張っている。呆れたことに、スキットルも一瞬にして懐に消えていた。

一方、アーサーは作業机を離れ、ターナから電報を受け取る。ターナが「ごゆっくり」と笑顔でドアを閉めると、クラウスは大きく息を吐いて弛緩した。

要するに、彼もまた、ハドソン家長女のファンなのだった。スコットランド・ヤードの警部が、自称発明家の変人に性懲りもなく付き合っている、二つ目の理由だ。

「ターナさん……今日もお美しい……」

「…………それ、本人に言わないと意味ないでしょう？」

「面と向かって言えるわけないだろ？ 心臓が破裂するわ！」

クラウスは真顔だ。コナンは「そうですか」と平淡に応えて、ターナに関する話題を打ち切った。

そんなことより、

「アーサー？ なんの報せだ？」

「……アイリーン嬢からだ。依頼を取り下げたい、と」

「な、なんだって？ どうして、急に？」

仰天するコナンに、アーサーが電報を差し出す。コナンは受け取ってマジマジと凝視した。その間に、アーサーは紙巻き煙草を取り出し、一本くわえて電気式ライターで火を付けた。もくもくと紫煙が上がる。

「さて……こういう展開をまるで予想しなかったわけではないが、にしても、進展が早い。本当に、一体何者だ？」

アーサーが煙草をくゆらせながら、不敵な笑みを過らせる。

靴底を鳴らしつつ部屋を行き来し、

「ちなみに、警部？ 裏取りはまだということだが、何人か名前は挙がってるんだろ？ 一番新しいクロエ・ノートンの『遊び相手』はわからないか？」

「ん？ あ、ああ。それなら、わかるぞ？ ウィリアム・クラム。去年ハウنزデイツちに店を構えた、若手の商人だ。儲かってる分、だいぶ貢いでたようだな。店はー」

「宝石店」

「ーだ」

クラウスはもはや達観した面持ちで、アーサーの台詞を肯定した。

アーサーはリビングを往復しながら、

「住み込み？ 通い？」

「ハア？ またか？ 住み込みだよ！ 構えた店の二階に住んでる。ちなみに独り暮らしだ」

「ふむ。……犯行は三日前の夜。さすがに手遅れか……いや」

アーサーが足を止める。

それから、素早く作業机に戻って機械を手にとると、くるりと空中で一回転させてから、コナンに投げ渡した。クラウスが大袈裟に避けー何しろ過去幾度か痛い目に遭っているーコナンが反射的に投げ渡された物を受け取る。

無骨で無機的なそれは、「剣」というより「警棒」、あるいは大型の「工具」に近い。が、手の中のズシリとした手応えが、「武器」であることを主張している気がした。

「来てくれ、コナン。手紙を回収しよう」

「ま、待ってくれ、アーサー。依頼はもうー」

「生憎、発想の種が芽生えてしまった」

戸惑うコナン、そしてクラウスを余所に、アーサーは肩を竦める。

「好奇心がね」

*

宝石商ウイリアム・クラムの店に二人組の強盗が侵入したのは、夜の九時前。すっかり客も引けた、閉店間際のことだった。

丸い黒眼鏡で目を、布を巻いて口元を隠し、意気揚々とナイフを振り回す強盗の一人に対し、もう一人の片割れは同じく布で顔を隠しながらもギクシヤクと強張っていた。ただ、その手に持った恐ろしいな警棒からは、バチバチと眩い火花が飛んでいる。

「やあ、こんばんは！ 強盗だ！ 大人しくしろ！」

なぜかノリノリの強盗が自己紹介すると、硬直していた女性店員がけたたましい悲鳴を上げた。同時に、店の奥でガタガタと音がして、階段を駆け上る足音が聞こえた。

「むっ、二階か。裏口から逃げないということはー脈在りだ！ 行くぞ、相棒」

叫び続ける店員を余所に、強盗の一人が駆け出す。もう一人も、ぎこちない動きで跡を追う。店舗を突っ切って店の奥に。階段を踏み破る勢いで登り、二階の部屋に飛び込んだ。

部屋に居たのは、一人の男性。歳は二十代後半というところだろう。一心不乱にトランクケースへ物を詰め込んでいたが、強盗たちがドアを開けた瞬間、弾かれたように振り返った。

「強盗だ！ 動くな！」

ナイフを突きつけつつ、強盗が怒鳴る。怒鳴りながら、ちらっとトランクケースの中身をのぞき、わずかに失望を過らせた。

もつとも、その一瞬の反応に、男は気付かなかつたらしい。

「まっ、待ってくれ！？ 金目の物なら、ここにはない。全部、下の店だ！ ああ、財布は、ほら。これだ。渡すから、手を出すな！」

トランクケースから財布をつかみだして、男は手前の強盗に投げ渡す。

「聞き分けが良いな」

強盗は片手で財布を受け取ると、ニヤリと笑った。

そして、そのまま踵を返し、男に背中を向けた。

男がほっとした顔で、一瞬、弛緩する。

その瞬間、強盗は今日の天気でも尋ねるような何気ない口振りで、肩越しに部屋を見回した。

「ところで、例の『手紙』はどこだい？」

「え」

気を抜いていた男が、とっさに首を動かした。

男の視線が向かったのは、一見何もない、板張りの壁。

しかし、強盗は鋭く目を光らせ、剃刀のような笑みを過らせる。

「そこか」

*

「つ、つまり、クロエ・ノートン殺害の犯人は、そのウィリアム・クラムだって言うのか？」

「十中八九ね」

ベーカー街のリビングで、電報を片手に呆然と尋ねるコナンへ、アーサーは身支度をしながら淡々と答える。

「宝箱の中身の半分近くが消えていたのが良い証拠だ。ウィリアム・クラムの貢ぎ物と見て間違いない。別れ話を切り出され、逆上して事に及んだとか、まあ、概ねそんなところだろう。

我に返ったあとで《ジャック・ザ・ナイトメア》の犯行に偽装することを思いついたんじゃないかな？ そして、クロエ・ノートンの住まいから消えていたのは、装飾品の他に、例の手紙

……。とすれば、犯行のあと彼と一緒に持ち去った可能性は、検討に値するほど十分に高い。察するに、彼もまた被害者と手紙のやり取りをしていて、そこから足が付くことを恐れたんだ。

犯行から三日となると処分したと考えるのが妥当だが、仮に、まとめて持ち帰ってしまったアイリーン嬢の手紙に何かしらの興味を持ったなら、まだ手元で保管している可能性もある」

「つ、つまり？」

「急いで確認しよう」

「これからか？」

「無論」

「しかし……大人しく白状するとは思えない。現時点では、彼が犯人だという証拠はないんだぞ？ それこそ、その手紙ぐらいだ。みすみす証拠となる手紙のことを喋らないだろう」

「大人しく白状しないなら、大人しくない形で白状してもらおうさ」

「どうやって？」

「そうだな。銀食器の彼らに倣うとしよう」

「は？ ど、どう言う意味だ？」

訳がわからず尋ねるコナンに、アーサーはニンマリと笑う。

「狂言さ」

*

「いやいやいや、やっぱりこれは、不味いだろ。いくら何でも、やり過ぎだー」

「火事騒ぎの方が良かったかな？」

「そういう問題じゃない！」

青ざめたウィリアム・クラムと対峙しながら、コナンとアーサーは小声でやり取りする。

アーサーの計画は、押し入り強盗を装って宝石店に入り、ウィリアムに手紙の場所を白状させるというものだった。その時点で色々と問い質したいことだらけだったのだが、アーサーの「大丈夫だ」と「急がねば」の二言で押し切られてしまった。後者はともかく、前者に関しては、いまだに何がどう「大丈夫」なのか理解できない。

いまごろ店の外ではクラウスも、必死にスキットルを叩いて常識を押し付けながら、「……俺は何も聞いてない……俺は何も見えていない……」と、念仏の如くに唱えているはずだ。

「トランクの中に手紙を入れてなかったときは、おっと、しくじったかと思ったが……我ながら鮮やかな機転だったな。とっさの手腕とは思えない」

アーサーは満足げに自画自賛する。コナンとしては、「おっと」のひと言だけでも冗談じゃないと怒鳴りつけたところだが、生憎そんな余裕はなかった。

「こんなことで逮捕でもされた日には、死んだ兄さんに顔向けできない……いざとなったら、こいつを見捨てても逃げ切らねば……！」

「ぶつぶつ言ってるの、聞こえてるぞ？ まだ終わってないんだから、集中してくれよ？」

過呼吸気味のコナンに、アーサーは平然と釘を刺す。

一方、

「ま、待て！ 待ってくれ！ 手紙とは、なんのことだ！ 知らないぞ。わた、私は、知らないっ。何も知らない！」

ウィリアムは観面に狼狽えていた。皮肉にも言うべきか、その大仰な慌てようが、かえって彼の言葉が真実ではないことを示している。本人は真剣らしいが、あまりに白々し過ぎる。

「残念だが、ウィリアム・クラム。君がクロエ・ノートン殺害の犯人であることは、もはや確定的だ。このあと市警^{ヤード}の人間が来る。せめて自首したまえ」

アーサーはそう言うのと、口元を覆っていた布を外した。

予定では、アーサーたちが手紙を回収したのち、外で待機中のクラウスに合図を送ることになっている。クラウスの立場としては、あくまで「偶然」押し入り強盗の現場に出くわし、彼らを抑えらえるために突入してくるのだ。二人組の強盗は、宝石を盗む間もなく、直ちに逃走。

その際、回収していた手紙を「落とし」、クラウスは「偶然」殺人事件の証拠を入手する、という筋書きである。

「とにかく、さっさと済ませよう。アー——相棒。その壁に、何かあるんだな？」

「おそらく隠し金庫の類だろう。羽目板を外してみてくれ」

アーサーの指示に頷いて、コナンがいそいそと壁際に向かう。

ところが、突然ウイリアムが動いた。トランクケースに手を突っ込んだかと思うと、コナンの行く手を遮ったのだ。それは、予想に反する、嫌に機敏な動きだった。

背後に壁を庇うように立ち、

「知らないっ……私は……私は何も知らない！ 私はただ、クロエを……彼女を愛して……なのにあいつは！ ああ、くそっ。くそおっ！ どうしてあいつは……、あいつが悪いんだ！ だから！」

ウイリアムは両目を血走らせ、口の端から泡を飛ばした。その手には、トランクケースから取り出した物が握り締められている。

華麗な装飾が施された、鞘入りの短剣。

「まさか！」

コナンが息を呑み、慌てて身構えた。

眼光を鋭くしてウイリアムをにらむ。

「……それは、犯行に使った刃物か？ いまの発言と合わせて、自白と受け取っていいんだな？」
コナンは慎重に尋ねたが、ウイリアムは返事をしなかった。そもそも、こちらの声が聞こえているかも怪しい雰囲気だった。さらに言えば、尋ねておいてなんだが、到底自白するようには見えない。

ウイリアムは、まるで全力疾走でもしたかのように息が荒かった。視線の焦点が合っていない。聞き取れないが、何かを低く呻いている。

「……薬物？ いや、しかし……」

ウイリアムのただならぬ様子に、背後のアーサーも困惑し、緊張するのがわかった。コナンはぎゅっと手の中の警棒——アーサー製作の《Eソード》を握り締めた。

と、そのときだ。

ウイリアムの視線がピタリとコナンに標準を合わせた。

背後でアーサーがハツとする。

「いま、瞳孔が妙な反応を——」

アーサーがつぶやいた瞬間だった。

「だから、お前等も、殺してやる！」

「——っ!？」

ウイリアムが襲いかかってきた。瞬時に鞘を抜き、短剣の切っ先を一直線に突き入れて

来る。

十分警戒していたにもかかわらず、防御できたのは間一髪だった。

ガキツ、と鈍い音を響かせ、《Eソード》が短剣の刃を払いのける。想像以上の手応えだ。少しでも気を抜いていたら、こちらが払いのけられていた。

「くっ!? こいつ!」

ウィリアムが奇声を上げながら、連続して短剣を振るう。突き入れ、斬り付け、ときには身体ごと体当たりしてくる。コナンは踏鞴を踏みながら、必死に短剣を、受け、流し、弾き返した。

すでに防戦一方だ。

「おい、コナン、しっかりしたまえ! 地元じゃストリートで鳴らした口なんだろう?」

「若気の至りを持ち出すな! それにこいつ、どう見ても正気じゃないぞ。なんだこの馬鹿力は!?」

ウィリアムは全身を躍らせながら、猿ましらの如く短剣を振るう。その切っ先がコナンの頬を掠め、髪の前を切り飛ばした。

「お、お、お前等も殺して口を封じれば、すべて元通りだ! 死ぬ! 死ぬえっ!」

「くっ!?」

コナンの全身が熱くなる一方、背筋には冷たい何か走った。ウィリアムは剣の扱いが上手いわけでは、決してない。だが、凄まじい勢いだ。捨て身で襲いかかってくる。

「コナン、電撃だ! 手元のスイッチを押せ! 短剣越しにでも、ショックは伝わる!」

「わ、わかった!」

アーサーの指示に応えて、コナンが《Eソード》のスイッチを押した。たちまち手の中でヴオンツと稼働音が鳴り、眩い閃光がバチバチと剣身で弾ける。室内が、白い光と黒い影に塗り分けられた。

そして、バシュー——と間の抜けた音が響き、《Eソード》の剣身がショートした。

「……ん?」

コナンの視線が、細い白煙を上げる《Eソード》に。アーサーが声のない悲鳴を上げる。

次の瞬間、短剣の刃が《Eソード》に叩き付けられ、身体ごとぶつかって来たウィリアムに、コナンが突き飛ばされた。

「ふっ!?」

壁に衝突し、コナンは床に崩れ落ちる。「コナン!」とアーサーが痛恨の声を上げる。

「なんてことだ。何度も斬り結ぶもんだから、中の回路がーって、ま、待つんだ、ウィリアム・クラム! この手の活劇は僕の担当ではーだから、ちょっと待って! 助けて、コナ

ン!?」

ウィリアムは標的をアーサーに切り替え、短剣の切っ先を向けてジリジリと近付いた。対するアーサーは、限界まで伸ばした右手でぶんぶんナイフを振って子供じみた牽制をする。

「くっ!? アーサーっ」

コナンが必死に身体を起こした。が、突き飛ばされた衝撃で、手足の動きが鈍い。そうする間に、ウィリアムが歯を剥いて怒号を上げた。

アーサーが、ひいひい、と目尻に涙を浮かべる。

コナンが歯を食いしばり、背後からウィリアムに向かって捨て身で飛びかかる、寸前――

バンツ!

室内に銃声が木霊し、ウィリアムが弾かれたように倒れた。

うああという呻き声。ウィリアムの肩が血に染まっていく。呆然と目を見開いたコナンとアーサーは、のろのろと銃声のした方向へと首を向けた。

「ったく……火遊びも大概にしろ、小僧ども」

極めつけの響めっ面でぼやいたのち、ドアの前に立ったクラウスは、銃口に、ふっ、と息を吹きかけた。

*

クラウスの手配した部下によって、ウィリアムは速やかに連行された。

連れ去られるウィリアムを見送り、コナンはほっと息を吐く。

銃撃を受けたあとは、ウィリアムもさすがに抵抗することはなくなった。だが、正気に戻ったようには見えなかった。突然の変化はいかにも不気味だが、ここから先の聞き取りはスコットランド・ヤードの仕事だろう。

一方のアーサーは、早くもいつものペースを取り戻していた。

物珍しげにクラウスの拳銃を観察し、

「軍以外で火薬式の拳銃を見るとはね。年代物だし、ひよっとして革命時の物かい?」

「おおよ。おかげで命拾いだろ? これに懲りたら、少しは謹め。色々とな」

拳銃をしまいながら、クラウスは仏頂面で忠告する。例によってアーサーの耳に届いているかは怪しいものだが、少なくともコナンの胸には響いていた。

「助かりました、警部。正直、危ないところでした」

「札はいいから、先に物証だ。例の手紙は、本当にあるんだろうな？　これでなかったら……まあ、いまとなつちやあ、ないならそれで、どうにでもなりそうだがよ」
髪を掻きながら、クラウスが言った。

最後の凶行こそ不気味なもの、状況的にウィリアムのとった行動は、クロエ・ノートン殺害を自白したに等しい。少なくとも、彼女の事件は解決したと言えるだろう。また、アイリーの依頼もすでに取り下げられている。実のところ、いまさら手紙に拘る必要は、ないのだった。

しかし、

「ここまで来ておいて、後には退けまいよ。コナン。その壁の羽目板だ。おそらく、すぐに外れる」

アーサーが告げ、コナンは頷く。ウィリアムがとっさに見た壁を触り、幾度か試行錯誤したのち羽目板をゴトリと取り外した。

果たして、壁の裏には狭い隙間があり、薄い箱が収まっていた。

コナンは箱を取り出して床に置き、蓋を取って中身を――

「……え？」

「お、おい。なんだ、これ」

「……っ！？」

コナンがぼかんとし、クラウスが息を呑み、アーサーがギラリと瞳を光らせた。隠されていた箱の中身。

それは、何通かの手紙と――真つ二つに割れた仮面^{マスク}だった。

《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面だ。

「……………」

アーサーが無言のまま割れた仮面の片方を手に取る。

顔の右半分は仮面をあてがい――

「……視界が狭い……こっちは本物らしいな」

我知らず、コナンは唾を飲んだ。

掠れた声で問いかける。

「どういうことだ、アーサー？」

アーサーは仮面をあてがったまま、ゆるりと微笑み、肩を竦めた。

「さて、まさに『悪夢^{ナイトメア}』だね。この事件は……僕の想定以上に、奥が深そうだ」

*

幕間

バンナー

と鳴り響いく銃声を聞いたあと、ハウンスデイツチの辻に停まっていた黒塗りの四輪馬車は、蹄を鳴らして動き出した。

「……予想以上だった。彼女はークロエは、かなり良いところまで行っていたようだな。惜しいことをしたよ」

そう言うと、座席に座る人物は、皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「とはいえ、ウィリアム・クラムの急変が《ギアス》の効果かは微妙だな。単に彼女の狂気に当てられたということも、十分に考えられる。彼女は確か、暗示術の覚えも悪くなかったはずだ。

……まあ、なんにせよ、見物ではあった。久しぶりに楽しい時間が過ごせたよ」

愉快そうに言う人物に対し、向かいの座席に座る男は、その軽い口振りに流されない、静かな眼差しを向ける。

「今回はあんたらしくない動きだった。何か理由があるのか、《教授》？」

「ん……まあね」

教授と呼ばれた人物は、髪を掻き上げ、含みのある表情で応える。

それから、首をドアの窓へ向け、外の景色に目をやった。

馬車の動きに沿って流れるガス灯の火を眺めながら、

「まさか、あいつがいるとは思わなかった。これも、縁か。世の中はーク玄妙だ」

馬車の窓から覗く街並みは、すでに暗い夜の帳が降りている。また、うっすらと霧が漂い始めていた。ガス灯の明かりが霧に霞み、辺りを柔らかく包んで行く。

橙色の明かりが闇と霧に溶ける中、馬車は石畳の上を滑るように走り去った。